L1J

冬期講習

解答

Ｚ会東大進学教室

高１東大国語

1章

【問題】（演習）

出典…長谷川眞理子『科学の目　科学のこころ』／筑波大・04年

文章略解

行動生態学において、過去における投資の大きさこそが将来の行動を決めると考えることを「コンコルドの誤り」という。これは、超音速機「コンコルド」開発のエピソードにちなんで名付けられたものだが、将来の行動に関する意志決定が過去の投資の大きさによるとしている点で誤りであり、本来、意志決定は将来の見通しと現在の選択肢によらねばならない。例えば、動物が求愛行動をずっと続けるのは過去の投資が大きいからと考えるのは人間の思考における誤りであり、動物には他の選択肢がないのかもしれないと考えるべきなのである。人間が犯しがちなこの誤りには、人間の思考形態に深くかかわるものがあるように思われる。

解答

問1　一羽の雄鳥が長い時間をかけ多くの餌を雌にあげて求愛行動をしたにもかかわらず見返りが期待できない時に、雄鳥は過去の投資を無駄にするわけにはいかないので求愛を続けるだろうと考えること。〔90字・解答例〕

問2　何人もの兵隊の死を無駄にすることはできないという理由で誤った作戦を続行したり、科学者がこれまで自分が大量の投資を行なってきた理論を捨てたくないという理由で誤った旧パラダイムを捨てなかったりすること。〔99字・解答例〕

問3　人間は過去の投資の大きさによって意志決定をし、動物は将来の見通しと現在のオプションによって意思決定をするという違いがあると考えている。〔67字・解答例〕

問4 動物の行動を方向付ける将来に対する意志決定は、将来の見通しと現在のオプションによるものであるが、人間は意識的な思考をすることにより、それを過去の投資の大きさによると解釈してしまう過ち。〔92字・解答例〕

問5 (ア)・(エ)

【問題】（自習）

出典…今村仁司『近代の思想構造』／早稲田大学・教育学部・00年・改

文章略解

日常生活は、任意の記号的事件の消費行動である三面記事的驚きから生まれる、神話的・想像的な幻影的物語の世界である。その世界と手を切るとき真実の驚きが生まれる。真実の驚きは、「考える」の生誕の場所であり、世界が存在することそのものに驚くこと、いわば自明性への驚きであり、神話的・幻影的世界を解体する。驚く能力を開発し復活させる態度は学説は異なってもここ二百年の哲学精神の共有財産であった。命題や主張は古びても、驚く能力は永遠である。

解答

問1　(ア)＝切断　(イ)＝救済　(ウ)＝崇高　(エ)＝基礎

問2　a＝ない　b＝ない　c＝ある　d＝ある　e＝ある　　問3　自明性への驚き〔25行目〕

問4　世界自体を問い考える傾向を封殺する〔12行目〕　　問5　(ウ)　　問6　(オ)

問7　驚きがなけ～必要である〔15行目〕　　問8　二

解説

問2　第五段落の始めで[1]「思考の驚きは、自明性への驚きである」と述べ、それは第一段落で述べている[2]「真実の驚き」のことを言い換えたものである。そしてさらにこの自明性への驚きというものが[3]「当たり前にあることに驚くこと」であって「ないことに驚くこと」ではないと説明されている。このことをふまえて、「ある」と「ない」を入れていく。

a　普通人が驚くのは「ない」ことに対してなのか、「ある」ことに対してなのか、を右の傍線部3と照らし合わせて考える。

b・c「なぜ［ b ］のではなくてなぜ［ c ］のだろうかと驚くべきである」と述べている内容と同じ内容が、直前にある「何もないことではなくて、むしろあることが問題である」のところで、ここと右の傍線部3とが一致していることを参考にして考える。

d　自明であるのは「ある」ことの方か「ない」ことの方かを、これも右の傍線部1と3の関係から考える。

e「本来の驚き」とは右の説明の傍線部2のことであり、その驚きが「ある」ことに驚くことか、「ない」ことに驚くことか、を右の説明の2と3の関係から考える。

問3　「真実の驚き」は、三面記事的驚きではなく、第二段落で述べられているように、「世界が存在することそのものに驚く」ことである。そしてこの驚きは、思考の動力を生み、「思考の驚き」となる。この思考の驚きについて第五段落の始めで「自明性への驚きである」と言い換えているので、六字以上、十字以内の字数制限に合わせて「自明性への驚き」が正解となる。

問4　筆者の言う「神話」とは、第六段落にあるように、「自明な世界、自明な考えかたを固定する」ものである。そしてこの神話（的精神）から切断したところに「思考の動力」が生まれるのである（第二段落）。「催眠にかける」とは、この「思考の動力」が生まれないように、神話的精神を持ち続けさせることを言うのであり、そのことを端的に述べているのが、第二段落の「世界自体を問い考える傾向を封殺する」の部分である。

問5　傍線部③の能力とは、直前に述べられている「世界自体を問い考える傾向を封殺する」神話的精神、幻想と想像の物語を解体する能力のことである。それは、言い換えれば第五段落に述べられている、「『日常的に慣れ親しんでいること』に驚くこと」であり、これと一致しているのは(ウ)である。

(ア)　後半の「極めて幸福な奇跡として考えることのできる能力」が論旨に合わない。ここが「疑い、驚くことのできる能力」と述べてあれば、筆者の論と一致する。

(イ)　「皮相な驚き」が世界を構成しているという論は文中のどこにも述べられていない。

(エ) 見世物的びっくりから覚醒することは、第五段落にあるように、「知性の酷使と激しい精神労働なしには」おこりえないことであり、「本能」とは逆のものである。

(オ) 「我々を取り巻く世界」が「非日常性に満たされた特異で神秘的なもの」であるという内容自体、文中に述べられていないことである。

問6 傍線部④の「この循環」が指しているのは同一段落（第三段落）の始めに述べられている「驚きがなければ『考える』はない。しかしその驚きを発見するためには『考える』が必要である。これは循環である」の部分である。そしてさらにそれはその直後で、「それ（循環）は決してたんなる矛盾ではない」と述べられ、最終的には第三段落の終わりで「知性（理性）と驚きはひとつである。」と言い換えられている。この言い換えの部分を端的に表現したのが、第六段落の始めにある「知的な驚き」である。それは「自明的な日常的世界からの目覚め」であり、「自明な世界、自明な考えかたを固定する神話の解体」をなすもので、「自明性の殻の破壊を目指し、より新鮮に驚く能力を開発」するものである。この内容と一致しているのは、(オ)である。

(ア) 第六段落の後半で哲学的知識や学派よりも重視されているのは、「幻想と神話からの目覚めと解放のための驚く能力」の方なので、(ア)は×。

(イ) 第四段落で宗教的知識や、美意識・倫理観は「神話的でイデオロギー的な物語」になると述べられているので、生産的な循環とは逆である。

(ウ) まぎらわしい選択肢であるが、循環そのものが生産的であるのではない。傍線部④の前に述べられているように、人間は世界のなかで生きるときの基本的在り方としてこの循環からまぬかれることはなく、物を考えるとき、この循環を生き、その生きているただ中で知性を酷使し、激しい精神労働をし、自明的、日常的世界から離脱し、神話を解体してゆき、自明性に対してより新鮮に驚く能力を開発する（生み出す）ことを指して「生産的」と述べているのである。

(エ) これも(イ)と同様に、「神話的でイデオロギー的な物語が生産」されることは、神話を解体する力を生む循環とは逆である。

問7 傍線部⑤は知性（理性）と驚きとの関係について述べており、それは循環の関係でもある。この循環の部分を具体的に述べているのが第三段落の始めの「驚きがなければ『考える』はない。しかしその驚きを発見するためには『考える』が必要である」の部

分である。この問題は**問6**で考えた筋道を逆にたどる問題である。

問8　挿入文中にある「見世物的びっくりではない驚き」とは、第一段落と第二段落とにある「真実の驚き」のことであり、この「真実の驚きをどうしたら経験することができるのか」という問いかけの答えは、第三段落中の「この驚きをみいだすために、思考の努力がある」の部分である。従ってこの挿入文は、第二段落の後ということになる。

2章

【添削課題】

出典……田中克彦『名前と言葉』／九州大学

文章略解

私たちがこどもにことばを身につけさせようとするときは、こどもにとって印象ぶかく関心のもてるモノを実際に見ながら指さして覚えさせるのが自然である。だが、家の中だけで育てられたこどもは見るモノの数も限られてしまうため、モノの名をまずは固有名詞として覚えてしまい、次いで、似たようなモノをいくつも見ることによって普通名詞への認識に到達する。このため、こどもにおいては固有名詞と普通名詞の境界はつけにくく、固有名詞を普通名詞ととらえてしまう現象が起こる。興味ぶかい例としてクレオール語であるトク・ピシン語の「メリ」が挙げられるように、この現象はおとなの世界にも見られることである。

解答

問1　自分の母語として既に知っているモノの名前

問2　こどもはモノの名前を指さして覚えるので固有名詞か普通名詞かの区別ができず、そのためそのモノの名は固有名詞であろうが、ただの「名前」として機能し、他の普通名詞と同じように使われてしまうという現象。

問3　トク・ピシン語で「女」にあたる語のメリは固有名詞であると言えるのは、トク・ピシン語が植民者の言語と先住民の言語が混ざってできたクレオール語であり、「女」を表すメリも元々は白人の言語における人名、つまり固有名詞の「メリ」を先住民が「女」一般を指すと思ったことから成立した言葉であるという歴史的背景を知っての上であるということ。

問4　①＝概念　②＝洞穴　③＝請　④＝澄　⑤＝唯一

特別問題

(ア)　こどもはオトや手ざわりなどをそなえた印象ぶかいものに興味関心をもつため、そこからことばを身につけていくのが自然なのに、親が無理矢理オトも動きもないようなモノの名から覚えさせようとするのは、こどもの興味関心を全く無視した結果になってしまうから。

(イ)　オトなどの感覚を通してモノの名を覚えていくことが本来の知の育成であるのに、知育道具の名を覚えさせることで学習の一歩を踏み出したと考え、高度な知の育成がなされると思い込んでいる親への皮肉。

【問題】（自習）

出典…開高健『裸の王様』／三重大学

文章略解

画塾を開いているぼくは、裕福な家庭の子の太郎が、家庭で抑圧されているためか、塾でも頑として画を描こうとしないので、何とかそのきっかけを作ってやろうと、さまざまな働きかけを試みている。ある日、エビガニの話から、ぼくは太郎の心にくさびを打ち込むことに成功したように思った。

解答

問1 叫びという肉体の衝動的行動が、閉ざした心を開かせたから。〔28字・解答例〕

問2 スルメで釣〔79行目〕

問3 昨日のかいぼりの興奮と喜びが今でも消えずに残っていること。〔29字・解答例〕

問4 外部に何の興味も示さなかった太郎が、確かな意志を示したから。〔30字・解答例〕

解説

問1 まず、少年が、何から救われたのかを押さえておく必要がある。傍線部(a)の前の段落を読むと、「まるで画を描こうとしない……ときほぐしたことがある。」「この子は……自分で描くことを知らない、憂鬱なチューリップ派だった。」とあることから、この少年は、自発的に絵を描こうとしない子供であることがわかる。それがこの叫びを境に「……彼は画を描いた。肉体の記憶が古びないうちに描かれた画は鋳型を破壊して……」とあるように、憂鬱なチューリップ派をすっかり抜け出している。つまりこの叫

びによって、画が描けない、ということから救われたのである。ではなぜ、救われたのか。ここでの叫びはその直後に「肉体の記憶」とあるように、体の底から沸き起こる、ほとばしる衝動である。そのこみ上げてくるものが、彼の心の殻を破ったのだ。画を描くという行為は、いってみれば自己表現である。それができないということは、心を閉ざしているということと同義である。従って、「叫び」によって心を開いた少年は、画を描くことができるようになったのである。このことを「救い」と言っているのである。

問2　傍線部(b)の直前までに、太郎の言葉は一切書かれていない。始終無口で無反応である。この傍線部で、「小さなつぶやき」を「耳にする」と書かれているということは、太郎に変化があったことになる。傍線部の直前の「ブランコ」のエピソードでもあるように、強い恐怖を感じてさえ「叫び」もあげなかった太郎の初めての言葉である。それほど重みを持つ言葉ならば、言った言葉が引用されていないのは、話の構成上からも不自然だと推測されよう。それならば、この「小さなつぶやき」を耳にしたことは、一つのトピックスとして描かれているはずだと考えられる。そこで、傍線部の次の段落を見てみる。

ここは「ひとりかわった子がいる」という人物紹介になっている。「太郎」ではないが、トピックスにおける『キー・パーソン(鍵を握る人物)』の可能性がある。この後の段落を続けて見てみる。この「かわった子」のエピソードになっている。「エビガニ」の話だ。この子の話に対して、果して「太郎」がアクションを起こしている。「すると、それまで」で始まる段落である。この段落の中に、次のように描かれている。「ぼくのそばをとおりながらなにげなく彼のつぶやくのが耳に入った」ここで「太郎」がつぶやいている。その次には会話文が出ている。これが「太郎」の言葉の引用である。よって、その冒頭の五文字を抜き出せばよい。

小説の構成として、重要なエピソードの提示の代表的なパターンなので、このような話の続け方を覚えておくとよい。この構成を図式化すると、次のようになる。

○　トピック・エピソードの効果的な提示パターン

・　エピソードの中心となる出来事を簡単に示す。……いわば『予告』に当たる。

↓

・　このエピソードに関係する主要な人物の紹介。……『キー・パーソン』の提示。

←

・　エピソードの発端を紹介して、時間軸に沿って展開。……エピソードの本体。

←

・　エピソードの中心を直叙する。……いわばエピソードのクライマックス。『予告』部分の実際の出来事が提示される。

問3　傍線部(c)の直後に、この様子が具体的に描写されているので、これを押さえると「彼の頭のなか……ひしめいていた」「紙をひったくると、うっとりした足どりで」「彼は……ため息ついて」「雄弁をふるった」などが目につく。これらのことから、ここでの「酔う」というのは、「陶酔」の意味での「酔う」であると判る。つまり、何かに深く心を奪われて、興奮したりうっとりしたりすることである。文章に即してこの心情を具体化すると、この少年は、昨日兄といっしょに小川でかいぼりをした興奮が覚めやらないでいるのだが、この状態を「酔う」と表現しているものと考えられよう。

問4　先ず「鍵」の正体を捉えることが先決だ。傍線部(d)まで読み進めていれば、もう一箇所「鍵」という言葉があったことに気付いているはず。「スルメで釣ればいいのに……」という、トピックの部分の次の一文にあったはずだ。「ぼくは小さな鍵を感じて、……」とある。この「太郎」の「小さなつぶやき」が「鍵」になっている。「鍵」が何を意味するのかは、この「つぶやき」が何を意味するのかに通じることになるわけだ。そうすると、この「つぶやき」が「ぼく」にとって持つ意味を捉える必要がある。そこで、この「つぶやき」を軸として、「太郎」との状況を、それまでの描写から捉えることになる。先ず、その前に「ぼく」の役割を明らかにしておく必要がある。第一段落の後半部に「ぼくは子供に画の技術を……暗示を投げる」とあることから、「ぼく」は画を通して、子供たちの「こわばり」をときほぐし、内部に埋もれているものを引き出すことを行っていると摑めよう。「電車を一台きり描いて筆を投げた子供」「まるで画を描こうとしない憂鬱なチューリップ派の子供」「抑圧者の名前を書き散らしてから画筆をとった少女」などのエピソードが、このことを示している。ここにおいての「ぼく」の考えは、「いつもおなじ手口で成功するとはかぎらないが、……きっと突破口は発見される」という点にある。「ぼく」が第一に考えているのは、「突破口の発見」＝「鍵」を見つけることである。

さて、「太郎」の場合は、「何日たっても画を描こうとしなかった」「内心のその機制を覗きこむ資料を……あたえられていなかった」「ほとんど無口で感情を顔にださず、……イメージを行動に短絡することがない」「彼の内部で発火するものはなにもない」のであり、「ぼく」は「まったく手のくだしようがなかった」のである。が、これには「小さなつぶやきを耳にするまでは」という条件が付いている。よって、この「小さなつぶやき」＝「小さな鍵」は、小さな「突破口」の発見だと言えるわけだ。この「突破口」は本文では、「脱出法」とも呼んでいる。何から「突破・脱出」するのかというと、本文から、「抑圧者＝鋳型」からの「突破・脱出」と判る。「太郎」にとっての「抑圧者＝鋳型」は、本文の「ぼくは大田夫人の調教ぶりに……」「大田夫人が彼に訓練を強制し、……支配している」などという部分から、「大田夫人」、すなわち「太郎の母」だと摑めよう。何を「突破」させるかは、本文から「内部で発火」する「感情」だと摑めるはずだ。

これらのことから、「鍵」というのは、「内部で発火する感情を鋳型となっている抑圧者から突破させるための手段・方法」だとまとめられる。なお、「鍵」という言葉を比喩的に使った場合、「なにかしらの困難な状況などを打開、解消するためのきっかけとなる手段・方法」という意味になるようである。「この問題を解くための鍵は……」と使われる場合が、これである。これを加味すると、この「小さな鍵」というのは、「太郎の内面に隠されている感情を引き出すことを邪魔しているものを打ち破るきっかけとなる手段」であり、それは「ほんのわずかなきっかけ」であるものと考えられよう。

「太郎」のほんの一言を「感情を引き出すきっかけ」として捉えた「ぼく」は、「太郎」のところへゆき、「単刀直入にきりこんだ」のだ。今まで「ほとんど無口で感情を顔にださ」なかった「太郎」が「やがて顔をあげると、キッパリした口調で」答えている。これに対して、「ぼく」は「にがい潮」ともいうべき「理屈」を言ってしまった。「貝〔＝太郎〕は蓋〔＝殻〕を閉じてしまう」と思ったが、「太郎」は「せきこんで早口にいった」。そこには「はっきりそれとわかる抗議の表情があった」のである。つまり、初めて「太郎」は「表情」＝「感情」を表したのだ。文中の比喩でいうなら、「貝〔＝太郎〕は蓋〔＝殻〕を閉じ」ずに「開いた」のである。「鍵がはまってカチンと音をたてる」というのは、「鍵が開いた」ことを意味する。この「鍵」の意味が、「太郎の内面に隠されている感情を引き出すことを邪魔しているものを打ち破るきっかけとなる手段」であるならば、これは「感情を引き出すこと」に成功したのだと言えよう。なぜ成功と判るのか。それは「感情が出たから」である。どこから「感情が出た」と判ったのか。「キッパリした口調で」「はっきりそれとわかる抗議の表情」によってである。「キッパリ」「はっきりそれとわかる」というのは、言い換えれば「確かな」といえよう。すなわち、「たしかな手ごたえがあった」のだ。「口調」や「抗議」は「意志」

の表明と考えてよいはずだ。

従って、ここの直接の解答は「太郎が確かな意志を示したから」のようなものになるだろう。これでは字数が足りないので、「太郎」についての説明、つまり、「ほとんど無口で感情を顔にださず、イメージを行動に短絡することがない」「彼の内部で発火するものはなにもない」を要約して加えてやればよい。そうすると、解答例のような答になるだろう。

●メモ●

3章

【問題】（演習）

出典…本居宣長『源氏物語玉の小櫛』〈巻二〉の一節　／　オリジナル問題

現代語訳

たくさんの物語書の中で、この物語〔＝『源氏物語』〕は、特に優れてすばらしい作品であって、総じてこれ以前にも以後にも、並ぶものがない。まず、これ以前に書かれた古い物語は、何事についても、それほど深く、丹念に書いているとも思われず、ただ通り一遍で、あるものは珍しくおもしろいことを主旨として、おおげさな描写が多く書かれてあったりして、どれもこれもしみじみとした情趣といった方面は、それほど詳しく深いところまで達していない。一方、これ以後の物語では、（例えば）『狭衣物語』などは、何でもすべてこの（源氏）物語の趣向を見習って、丹念に書いているとは思われるが、（内容は）たいそう劣っている。その外（の物語）もすべて（これと）同じである。ただこの（源氏）物語が、このうえなく（すばらしく）て、ことに（趣）深く、万事に丹精をこめて書いているものであって、すべての文章の言葉づかいがすばらしいことは、今更言うまでもないことで、この世に生きる人々の様子、春夏秋冬折々の空の情景、木や草のありさま（に至る）まで、すべてにつけてすばらしい描き方である中でも、男と女、各々の人の様子、心の動きを、それぞれみな別々に書き分けて、ほめている部分などでも、皆その人その人の様子や性格にしたがって、一様でなく、よく（書き）分けられていて、（まるで）実在の人を目の前に見るように（その人物が）想像できるなど、並ひととおりの筆の力が、まったく及ぶことのできない書きぶりである〔＝並の作者が、かりそめにも及ぶことのできるものではない〕。

解答

問1　(ウ)　　問2　(a)＝(ウ)　(c)＝(ア)　(d)＝(イ)　　問3　②・③　　問4　なし

問5　源氏物語の文章のことばづかい〔14字・解答例〕

問6　(イ)

【問題】（自習）

出典…『宇治拾遺物語』〈巻八〉　／　秋田大学

現代語訳

昔、愛宕の山に、長い間仏道修行している徳の高い僧がいた。長年修行をして、僧坊を出ることがない。（その僧坊の）西の方に猟師がいた。（猟師は）この僧を尊んで、（僧のもとへ）常に参上しては、物を差し上げたりなどした。（ある時猟師は）長いこと参上しなかったので、食糧袋に干飯などを入れて、（僧のもとへ）参上した。僧は喜んで、ここ数日来（会えなかったので）会いたいと思っていたことなどをおっしゃる。そのうちに、（僧が猟師に）にじり寄っておっしゃることには、「最近、たいそう尊いことがある。このところ長年、余念なくお経を大切にし読み続け申し上げている御利益であろうか、このごろ毎晩、普賢菩薩が象に乗ってご出現になる。今晩（ここに）泊まって（普賢菩薩を）拝みなさい」と言ったので、この猟師は、「（それは）実に尊いことであるようです。そういうことならば、（ここに）泊まって拝み申し上げましょう」と言って、（僧坊に）泊まった。

さて、（猟師は）僧の召し使っている童子でそこにいた者に尋ねた。「僧がおっしゃることは、どういうことなのか。お前も、この仏を拝み申し上げたのか」と尋ねると、童子は、「五、六度拝見いたしました」と言うので、猟師は、「自分も拝見することがあるかもしれない」と思って、僧の後ろで、寝もしないで起きていた。九月二十日のことであるから、夜も長い。今か今かと待つうちに、夜中も過ぎたろうと思うころに、東の山の峰から月が出るように見えて、峰の嵐も激しい時に、この僧坊の内が、光が差し込んだように明るくなった。見ると、普賢菩薩が象に乗って、しだいに現れておいでになり、僧坊の前にお立ちになった。

僧は泣きながら拝んで、「どうです、あなたは（普賢菩薩を）拝み申し上げましたか」と言ったので、「どうして拝み申し上げないことがありましょうか、いや拝み申し上げました。この童子も拝み申し上げています。はいはい、たいそう尊いことです」と言って、猟師が思うことには、「僧は長年お経を大切にし、読み続けていらっしゃるからこそ、その目にだけは（普賢菩薩が）ご出現になる（って見え）るのだろうが、この童子や自分などは、お経の上下の向きもわからないのに、（普賢菩薩が）ご出現になるのは、納得のいかないことだ」と心の中で疑って、「このことを試してみよう。これは罪を得るようなことではない」と思って、とがり矢を弓につがえて、僧の拝み込んでいる上から、頭越しに、弓を強く引いて、ヒュッと射たところ、（普賢菩薩の）御胸のあたりに当たったようで、火を

うち消すようにして、光も消えてしまった。谷へ鳴り響いて、逃げて行く音がする。僧は、「これはどうなさったのだ」と言って、ひどく泣くことはこの上もない。男〔＝猟師〕が申し上げたことには、「僧の目には（普賢菩薩が）ご出現にな（って見え）るだろうが、自分のような罪深い者の目にもご出現にな（って見え）るので、（この普賢菩薩がまことの仏であるかどうかを）試し申し上げようと思って射たのです。まことの仏であるならば、まさか（お体に）矢はお立ちにならないだろう。だから（矢が立ったところをみると）怪しいものです」と言った。夜が明けて、血（の跡）を尋ねて行って見たところ、一町ほど行って谷の底に、大きな狸が、胸からとがり矢を射貫かれて、死んで横たわっていた。

解答

問1 ①＝にじり寄っておっしゃる

②＝ここ数日毎晩のように普賢菩薩が姿を現すという不思議な霊験を密かに自慢したい気持ちと同時に、久しぶりに訪れた親しい猟師に特別にそのことを教えてあげたいという気持ち。〔いずれも解答例〕

問2 聖は長年お経を大切にし、お読みになっているからこそ、その目にだけは普賢菩薩がご出現になって見えるのだろうが、この童子や自分などは、お経の上下の向きもわからないのに、普賢菩薩がご出現になるのは、納得のいかないことだ。〔解答例〕

問3 どうして拝み申し上げないことがありましょうか、いや拝み申し上げました。この童子も拝み申し上げています。〔解答例〕

問4 (イ)

問5

係助詞	結びの語	結びの活用形
なむ	ある	連体形
や	ある	連体形
こそ	なれ	已然形
	め	已然形
	め	已然形
ぞ	候ふ	連体形

解説

問1　①口語訳の問題。まず傍線部を品詞分解すると、「ゐより（動詞）／て（助詞）／のたまふ（動詞）」となる。「ゐより」は四段活用の動詞「ゐよる（居寄る）」の連用形。「ゐよる」はワ行上一段活用の動詞「居る」に「寄る」が付いた複合動詞で、「座ったままで近寄る、にじり寄る」という意味がある。「て」は接続助詞で、現代語の用法と同じく単純接続を表す。「のたまふ」はハ行四段活用の動詞「のたまふ」の連体形で、「言ふ」の尊敬語として「おっしゃる」という意味を表す。したがって、正解は「にじり寄っておっしゃる」となる。なお、「のたまふ」は下に体言「やう」が続いているため、終止形ではなく、連体形である。そこで口語訳の際には「やう（現代語で「こと」）」に続く形で訳すこと。

②読解問題。動作から動作主の気持ちを考える問題。話の場面設定や動作主が置かれている状況を正確に把握し、それらを考慮して気持ちを想像していく。

設問文に「聖のどんな気持ちがうかがわれるか」とあるところから、傍線部の動作主が聖であることは明らか。また文脈から、

聖は訪ねてきた猟師に近づいて話をしたことが読み取れる。

そこでまず、聖の話の内容をみると、要点は「このところ毎晩、普賢菩薩が象になって姿を見せる」ということである。普賢菩薩が白い象に乗っている姿はよく絵に描かれているものの、仏様であるから実際に姿を現すことはまず考えられない。これは非常に珍しく、不思議な霊験であると言っていい。聖は、普賢菩薩が現れることについて、自分がお経を大切に思って心をこめて読んでいる、その御利益ではないかと言っている。珍しい体験をすると誰でも人に話したくなるものだが、ここでは自分が仏道に専心しているからこそ普賢菩薩が姿を見せてくれるという、多少なりとも自慢めいた気持ちも含まれていると考えられる。また、聖は猟師に僧坊に泊まって普賢菩薩の姿を見、拝むよう勧めている。これは猟師にもありがたい仏様の姿を拝ませたいという聖の好意によるものと考えられる。しばらくぶりに来た猟師に対して、聖はとてもタイミングがいいと思い、この機会にもてなしたいという気持ちもあったであろう。

次に、「にじり寄る」という動作の意味を考えてみる。二人の人間が普通に向かい合って話をする状況と比較すると、「にじり寄る」からは、話相手のそばに近寄って小さな声で話をするといった姿が思い浮かべられる。これは、非常に大切な話、人に聞かれたくない話をする際にとる行動である。ここでは、仏様に対する恐れ多さもあって、聖が普賢菩薩の件を大勢の人に触れ回ったとは考えにくい。おそらくは僧坊内の人しか知らなかったであろう。でも、猟師は聖を敬い、常に贈り物をしている。今回も手土産を持って訪れた。親しく交流し、好意を持っている猟師には、特別にこっそりと話を打ち明けようといった気持ちがあったと考えられる。

問2 読解問題。登場人物の心理を、文脈をたどりながら正しく読み取ることが要求されている。その上で、さらにここでは口語訳の力も問われている。まずは本文を丁寧に読みながら、心理描写がどこにあるのかを見つけることである。

そこで、傍線部(c)以降の文中から、さしあたり猟師の気持ちが書かれている箇所を順に抜き出してみる。まず最初は、普賢菩薩の姿を目にした場面で、聖に向かって言った「おいおい、いみじう貴し〔＝はいはい、たいそう尊いことです〕」という言葉である。これは普賢菩薩を尊び、それを目にできた感動の気持ちであり、普賢菩薩は尊いものであるから拝むことを期待した傍線部(c)の気持ちと通じ合うものである。

次は、その直後にある「猟師思ふやう」に続く「聖は、年ごろ……心は得られぬことなり」の箇所である。この箇所を口語訳し

て内容を解釈する。「年ごろ」は「長年」の意。「たもち」はタ行四段活用の動詞「たもつ（保つ）」の連用形で、「守るべきものとして大切にする、保持する」という意味。ここでは、前後に「経」や「読む」という語が用いられているので、「お経を大切に思い、読み続けている」という意味になる。「読み給へばこそ」の「給へ」は四段活用「給ふ」の已然形で、尊敬を表す補助動詞。已然形に接続助詞の「ば」が付いているので確定条件の原因・理由（「～なので」）の意味で下に続いていく。また、係助詞「こそ」は強意を表すと同時に、係り結びの法則によって結びの語を已然形に変える。ここでは、「見え給はめ」の「め」が推量の助動詞「む」の已然形で、結びの語になるが、文がここで終わらずにまだ下へ続いていくために、「～けれども」という逆接の意味が生じる。また、「見え（見ゆ）」にはさまざまな意味があるが、ここでは「（人に）見られる」という受身の意味と考えられる。主語は、尊敬の補助動詞「給は（給ふ）」が用いられているところから、「普賢菩薩」になる。「普賢菩薩が人から見られる」というのは、よりわかりやすく言えば、「普賢菩薩が現れる」ということである。「その目ばかり」の「その目」は聖の目を指し、「ばかり」は「～だけ」という限定の意を表す副助詞である。そこで、ここまでの箇所を口語訳すると、「僧は長年お経を大切にし、読み続けていらっしゃるからこそ、その目にだけは（普賢菩薩が）ご出現にな（って見え）るのだろうが」となる。

さらに続きを見ると、「経の向きたる方も知らぬに」の「たる」は完了の助動詞「たり」の連体形であるが、ここでは存続の意味で用いられている。また、「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形で、「に」はここでは逆接の意で下に続いていく。「見え給へる」は先の「見え給はめ」と同様、普賢菩薩が現れる意であるが、「る」は完了の助動詞「り」の連体形。最後の箇所は「心／は／得／られ／ぬ／こと／なり」と品詞分解でき、「心（は）得」はア行下二段活用の動詞で「納得する・わけがわかる」という意味。「られ」は助動詞「らる」の未然形でここでは可能の意味を表し、「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形、「なり」は体言「こと」に接続しているので、断定の助動詞「なり」である。そこで、後半を口語訳すると「この童子や自分などは、お経の向いている方角もわからないのに、（普賢菩薩が）ご出現になるのは、納得のいかないことだ」となる。

ここに表れている猟師の気持ちは、「納得できない」という言葉が示すように、普賢菩薩に対する疑いである。(b)で感じた少しの疑問よりははるかに強いもので、この後猟師は普賢菩薩の正体を明らかにするための行動に出る。普賢菩薩に対して尊くありがたく思っていた気持ちが明らかに変化している。したがって、ここが求める該当箇所である。

問3　口語訳の問題。傍線部の意味を押さえた上で、文脈を丁寧にたどって省略されている内容を考える。

「いかがは」は、副詞「いかが」に係助詞「は」が接続したもので、「いったいどのように」という疑問や「どうして～だろうか、いや決して～ではない」という反語を表す。または疑問表現の形で「どんなにか・さぞかし」という程度のはなはだしさを表す用法もある。

ここは、「普賢菩薩をあなたは拝み申し上げたか」という聖の質問に対する猟師の答えである。普賢菩薩が象に乗って現れた様子は既にはっきり記されており、また、「いかがは」の後で「この童も拝み奉る」と言っているところから、猟師も間違いなく拝んだと考えられる。そこで、「いかがは」は疑問の意では意味が通じず、確かに拝んだということを言うための、反語を使った強調表現だと考えられる。したがって正解は「どうして拝み申し上げないだろうか、いや拝み申し上げました」となる。なお、「童も拝み奉る」の「奉る」は、ここでは謙譲を表す補助動詞で「～し申し上げる」という意味になる。普賢菩薩に対する敬意を表す語なので、「いかがは」の後に省略された表現を補う際にも用いる必要がある。

問4 解釈問題。批評文を正確に読み取り、本文のどの内容についてどのように批評されているのかを考えていく。

批評文を口語訳すると次のようになる。「僧であるけれど、無知であるから、このように化かされたのである。猟師であるけれども、思慮があったので、狸を射殺し、その化けの皮を剥いだのである」。普賢菩薩は狸が化けたものであることを聖は見抜けなかったが、猟師は見破ったということに関する批評である。その理由として、聖は無知で、猟師はおもんぱかりがあると記されている。「おもんぱかり（慮り）」は「十分に考えること・思慮」という意味。猟師は、仏の教えに無縁の自分に普賢菩薩の姿が見えるのは納得できないと理性的、論理的に判断し、普賢菩薩の正体を明らかにしようと試みた。それに対し、長年の仏道修行を積んだ高徳の聖は、疑いもせずに盲目的に信じた。ここでいう「無知」とは、現代語で用いられている「知識がないこと」といった意味ではなく、猟師の「おもんぱかり」の対義語として、「理性的・論理的ではないこと」を意味していると考えられる。したがって正解は(イ)となる。他の選択肢を見ると、(ア)で「無知」を「学識がないこと」と解釈しているのは、先にも述べたようにここでは不適当。また、(ウ)の「世間慣れしている」、(エ)の「疑り深い性格」、(オ)の「はっきりとした意識」はいずれも「おもんぱかり」の解釈としては無理があるので、やはり不適当。

問5 文法問題。係り結びの法則についての知識が問われている。係り結びとは、文中に係助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」があると、

結びの語が連体形になり、「こそ」があると已然形になるという文法上の法則のことである。そこで今回の設問に対しては、まず本文中から係助詞を探し、それに呼応する結びの語を見つけることになるが、結びの語は一語であることに注意する。

係り結びの箇所を順に指摘すると、

・「よに貴きことにこそ候ふなれ」
・「五六度ぞ見奉りて候ふ」
・「我も見奉ることもやある」
・「読み給へばこそ、その目ばかりに見え給はめ」
・「聖の目にこそ見え給はめ」

の五カ所である。傍線部が係助詞、二重傍線部が結びの語である。係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」は強意を表し、「や」「か」は疑問か反語の意を表す。「我も見奉ることもやある」は、文脈から「自分も拝見することがあるか（拝見することがあるかもしれない）」という意味になるので、ここでの「や」は疑問の意味になる。用意されている解答欄を見て、記入する場所をよく考えること。

●メモ●